

香川縣 大正七年ノ流行ニ際シテハ各地共ニ患者一時ニ發生シ醫師又ハ看護婦ニシテ罹病スルモノ尠ナカラス治療機關殆ト休止ノ状態ニアリシニ鑑ミ大正八年ニ於テハ警察官署長ヲシテ其ノ管内在住ノ醫師罹病ノ場合ハ急報セシメ殊ニ離島山間僻地ニシテ他ニ醫療ヲ求ムルノ途ナキニ至レル場合ハ縣ニ於テ救護班ヲ組織シ派遣スルコトトセリ例ハ大正八年一月二十七日ニ至リ仲多度郡ノ離島ナル廣島村ニ於テ大正八年一月二十七日右ノ狀況ナル報告アリタルヲ以テ直ニ醫師二人藥劑師一人看護婦二人ヲ以テ救護班一隊ヲ派遣シ二月十七日迄ニ同島ニ於テ百九十一人ノ患者ヲ治療シ又二月十日頃ヨリ木田郡與鹿村ニ於テ本病猖獗ヲ極メ且ツ在住ノ醫師ナク治療上甚タシク不便ヲ感シタルヲ以テ救護班ヲ組織シ二月十二日同地ニ向ハシメ三月十四日迄ニ九十一人ノ患者ヲ治療セリ其ノ他貧困者ニシテ醫療ヲ求ムル途ナキモノニ對シテハ^{財團}濟生會ノ繰越金一千三百九十三圓ヲ支出シ救護班ヲ行ヒタリ

愛媛縣 爆發的ニ發生シタル場合及僻陬ノ地ニシテ交通不便且ツ醫療ヲ受クルニ困難ナル地方ノ救護ヲ目的トシテ技師防疫員看護婦ヲ以テ救護班ヲ編成シ救護ニ從事セシメ相當效果ヲ舉ケ得タリ

福岡縣 各地ニ流行猖獗ヲ極メ細民患者ニシテ醫療ヲ受クルノ資ニ乏シク困窮セルモノ續出セルヲ以テ大正九年一月赤十字社福岡支部ト連繫シ醫師一名看護婦二名事務員一名ヲ以テ救護班ヲ編成シ本病流行ノ中心地ニシテ且ツ細民勞働者ノ多キ門司小倉若松八幡ノ四市ニ各一班ヲ派遣シ救護ニ從事セシメタリ

大分縣 貧困者ニ對シテハ直接^{財團}濟生會治療券ヲ交付シ救護ニ努メタリ

佐賀縣 患者ノ治療ニ關シテハ通牒其ノ他ノ方法ニヨリテ可及的醫療ヲ獎勵シ貧困者ニ對シ

テハ醫師會及濟生會等ニ交渉シテ治療ヲ行ハシメ醫師不足ノ個所ニハ縣ヨリ技術員ヲ派遣シテ診療補助スル等努メテ遺漏ナキヲ期シタリ然レドモ本病流行ノ初メニ於テハ一般ニ之ヲ輕視シテ治療ヲ等閑ニ附スル者多ク其ノ間病毒ハ迅速ニ蔓延シ一時ニ多數ノ患者續發セル爲メ當時藥品材料ノ拂底及醫師ノ不足ト共ニ治療等意ノ如クナラサリシ時期アリシモ本病ノ恐ルヘキヲ認メラルルニ至リ自カラ各種ノ方法ヲ講シ醫療ヲ受クルモノ多キ狀況トナレリ

熊本縣 流行著シキ地方ニ對シテハ常置看護婦ヲ派シ重症患者ノ巡回看護ニ從事セシメタリ

鹿児島縣 貧困者ニシテ醫療ヲ受クルコト能ハサル者ニ對シテハ^{財團}濟生會ニヨル救護ノ途ヲ講シ其ノ他家盡ク罹患シタル家族ニ對シテハ衛生組合員ヲシテ之カ救護ニ當ラシメ又始良郡薩摩郡ノ一部ニハ醫療機關ノ缺乏セル土地アリタルヲ以テ縣ニ於テ救護班ヲ組織シ警察醫及藥劑師タル技術員ヲ派遣シテ救護ニ從事セシメタリ

二、各種公益團體活動ノ狀況

本病ノ豫防並ニ救護ニ關シ各種公益團體ノ活動亦著シキモノアリ

大正七八年流行ノ初期ニアリテハ一般ニ未タ本病ノ性質ヲ知悉セス漸ヤク流行熾烈ヲ極ムルヤ此ノ種團體ノ活動劃策セラレタルモノアリタルモ二三ノ外ハ實施ヲ見スシテ流行終熄ヲ告クルニ至レリ。然ルニ本病ノ流行ハ其ノ蔓延ノ全國的ナリシト其ノ傳播ノ一部階級ニ局限セズシテ職業年齢ヲ問ハス普汎的ナリシトニ因リ被レル慘禍ノ多大ナリシカ爲メ殊ニ八九年ノ所謂後流行時ニ於テハ國民一般ニ本病ノ怖ルヘク且ツ之カ豫防救護ノ急務ナルヲ覺リ一面ニ於テ當該官憲ヨリノ慈惠注意モアリ茲ニ各種團體ノ活動ヲ見ルニ至レリ

各種公益團體活動ノ狀況ヲ摘録スレハ概要左ノ如シ

醫師會ノ活動トシテ主ナルモノハ町村住民ノ豫防接種ヲ實費ニテ行ヒ又ハ施療藥ヲナシ或ハ施療券ヲ交付シテ醫療ヲ普及セシメ豫防ノ方法ヲ指示シテ傳染ノ機會ヲ少カラシムルニ努ムル等諸般ノ事項ニ付其ノ活動ヲ見タリ

藥劑師會ニ於テモ含嗽劑ノ實費供給ヲナシ其ノ普及宣傳ニ努メタルアリ

衛生組合ニアリテハ全然何等ノ方法ヲ講セサル地方アリタルモ又相當活動ヲ見タル地方モ尠ナカラス或ハ豫防心得書ノ配布「マスク」ノ使用、含嗽ノ勵行、豫防接種ノ施行ニ關シ宣傳普及ニ努メ或ハ衛生講話會ヲ開催シ或ハ組合内ヲ巡回シテ健康狀態ヲ觀察シ患者アル場合ハ努メテ醫療ヲ受ケシムルノ方法ヲ講シ其ノ他藥餌ノ供給ヲナス等見ルヘキモノアリタリ

赤十字社支部財團濟生會ノ活動ニ就テハ救療ノ項ニ記載セルカ如ク救療班ノ設置、施療券ノ交付、無料豫防接種等ヲ行ヒ一般ニ裨益スル處少シトセス

各地方ノ私立衛生會支部モ亦或ハ機關雜誌ヲ利用シテ豫防宣傳ヲ行ヒ或ハ含嗽劑ノ無料配布「マスク」實費販賣其ノ他無料豫防接種ヲ行ヒタリ

在郷軍人會、青年團等ニ於テ簡易「マスク」ヲ急造シ無償ニテ貧困者ニ給與シタル地方モアリタリ

其ノ他救世軍、佛教婦人會、花ノ日會、愛國婦人會等ニ於テモ或ハ「マスク」ヲ製造シ實費ニテ配布シ或ハ之ヲ貧困者ニ給與スル等本病ノ豫防ニ力ヲ盡シタリ

北海道 各地衛生組合ハ豫防上ノ印刷物配布其ノ他豫防思想ノ宣傳「マスク」ノ使用、含嗽ノ勵行、豫防接種ノ施行等ニ關シ相當努力ヲ爲シ又醫師會ハ各區町村ニ於ケル豫防接種ニ無報酬ニテ從事シ又ハ救療ニ應援スル等、藥劑師會ハ含嗽劑ヲ實費ニテ供給スル等夫々活動ヲ爲シタリ

東京府 醫學士會ハ大正九年一月十五日ヨリ二十六日ニ至ル間東京市内麻布、赤坂、四谷、小石川

本郷、下谷、淺草、本所、深川等ノ各區ニ豫防注射所ヲ開設シ警察官應援ノ下ニ豫防接種ヲ受クルノ實力ナキ細民ニ對シ無料豫防接種ヲ施行シ其ノ數第一回五千六百二人、第二回二千三百四十八人ニ達セリ財團濟生會本會ニ於テハ從來巡回救療班八班（一班醫師一看護婦一、小使二）ヲ以テ東京市及隣接郡部ヲ巡回診療ニ努メ居リシカ流行性感胃猖獗ヲ極メタル大正九年一月二十日ヨリ更ニ臨時救療班二班ヲ加ヘ大ニ細民ノ診療ニ努ムル所アリキ。救世軍ニアリテハ廳ニ於テ「マスク」供給方法不十分ナルト且ツ之カ獎勵上活動寫真館、劇場入口及街路等ニ於テ販賣方ヲ交渉スルヤ快諾シテ大正九年一月十九日ヨリ直ニ隊員ヲ日比谷、須田町、小川町、尾張町其ノ他ノ場所ニ派シ大ニ其ノ販賣ニ努メ獎勵上多大ノ效果ヲ舉ケタリ。佛教婦人青年會本會ニモ亦「マスク」ノ供給ヲ圓滑ナラシメ且ツ其ノ獎勵上之カ製作及路上販賣ヲ交渉シタル結果會長ハ自ラ華族階級及各寺院等ニ誘説シ會員並其ノ關係學校生徒ヲシテ製作販賣ニ從事セシメ大ニ效果ヲ舉ケタリ。花ノ日會ニモ亦前項同様ノ交渉ヲ爲シタルニ路上販賣ニ就テハ遂ニ其ノ容ル所トナラサリシモ之カ製作ニ付盡力スル所アリタリ

京都府 郡市トモ衛生組合委員相協力シテ豫防接種ノ督勵「マスク」ヲ使用並ニ含嗽ヲ獎勵スルタメ印刷物ノ頒布宣傳衛生講話會ノ開催等ニ努力セシノミナラス患者ノ早期發見ニ努メ之ヲ發見シタルトキハ速ニ醫療ヲ受ケシムル等ノ方法ヲ講シタリ、其ノ他在郷軍人會、青年團、女學校生徒等簡易「マスク」ヲ急造シ無償ニテ貧困者ニ給與シ又小學校ニ於テハ手工トシテ「マスク」ノ製作方法ヲ教習シ是ヲ家庭ニ應用セル等ノ事例少カラズ

大阪府 衛生會ニテハ含嗽劑ノ無料配付「マスク」ヲ實費販賣ヲナシ且ツ大阪婦人矯風會援助ノ

下ニ市内十箇所ノ樞要地點ニ於テ「マスクデー」舉行左記宣傳書ヲモ併セテ配布シ其ノ成績見ル可キモノアリタリ大阪婦人「ホーム」モ亦「マスク」ヲ製造及實費販賣ニ相當助力セリ

流行性感胃豫防の爲め

- 一、呼吸保護器を實費（當分の内一個 金十五錢）にてお頒ち致します御希望の方は事務所へお申込みわれ
- 二、含嗽液を無料にて差上げます御入用の方は何時にても容器（ビール瓶がよろしい）御携帶事務所迄お越しあれ

大正九年一月

東區高麗橋西詰濱側

大阪府衛生會

電話本局一五番

神奈川縣 衛生組合青年會等ノ團體ニ於テ豫防思想ノ宣傳ニ努メ豫防接種ノ施行ニ盡力シタリ其ノ他「マスク」實費製造販賣ニ對シテハ社團法人神奈川縣救濟會、工業學校、市内高等女學校、篤志看護婦人會ノ援助ニヨリ迅速且ツ安價ニ一般需要ニ應シ得タリ

新潟縣 新潟縣私立衛生會ニ於テハ其ノ機關雜誌ヲ利用シ常ニ豫防警戒ヲ與ヘ傍ラ豫防宣傳紙ヲ各要所ニ掲載シ其ノ都市支會ニ於テハ豫防上ノ講話無料接種等ヲ行ヒ大ニ豫防ニ努力セリ。各都市醫師會ニ於テハ務メテ市町村ノ請求ニ應シ講話及接種等ニ便益ヲ與ヘタリ、各市町村衛生組合ニ於テハ自衛的警戒ノ爲メ患者ノ發見ニ努メタリ

埼玉縣 赤十字社埼玉縣支部ニテハ流行地ニ出張シテ患者ノ巡回看護ヲナシ濟生會ニテハ貧困者ニ對シ治療券ヲ交付シ衛生組合ニテハ組合内ノ健康狀態ヲ視察シ其ノ他藥餌ノ供給等見ルヘキモノ抄カラス、醫師會ニアリテハ貧困者ノ施療施藥ハ勿論醫師ニ不足セル地方ニハ互ニ應援シテ豫防撲滅ニ盡瘁セリ

群馬縣 日本赤十字社群馬支部ハ縣ト協議シ豫防心得書十萬枚ヲ縣下一般ニ配付セリ尙愛國婦人會ト協議ノ上「マスク」ヲ製造シテ市町村ニ配布シ且貧困者ニ給與シタリ

千葉縣 一、二團體ニ於テ豫防接種施行「マスク」購入、含嗽ノ獎勵等ニ際シ斡旋シ其ノ他流感死者ノ葬儀ニ際シ多衆集合ヲ避ケシメタルニ過キス

茨城縣 赤十字社本縣支部ヲ慈惠シ金一千圓ヲ支出セシムルコトヲ得タルヲ以テ右支部ニ救護所本部ヲ設ケ郡役所所在地ニ救護所出張所ヲ置キ一般希望者ニ無償ヲ以テ豫防接種ヲ行ヒタリ、愛國婦人會本縣支部ヨリ「マスク」販賣ニ因ル補償金五百圓ノ支出ヲ得一萬個ノ「マスク」ヲ製作シテ一般へ販賣セリ、縣郡醫師會ニ於テハ患者ニ對シ消毒其ノ他豫防心得ヲ指示シ其ノ他細民ニ對スル施療實費豫防接種ニ應シ其ノ他患者申告方ニ對シ盡瘁スル等各方面ニ活動ヲ見タリ、其ノ他市町村ニ於テハ豫防班ヲ組織シ町村ニ豫防組合ヲ設ケ檢病的戸口調査、患者ノ隔離、消毒ノ指導等ニ關シ活動セル向モアリ

栃木縣 日本赤十字社本縣支部ニ於テ接種班二班ヲ組織シ流行猖獗毋モ甚シク而カモ醫師ノ供給困難ナル地方ヲ撰ミ接種ノ傍ラ患者ノ救療ニ從事シ愛國婦人會本縣支部ニテハ「マスク」ノ作製配布及其ノ使用ノ督勵ヲ宣傳スル等機宜ニ適セル活動ヲ爲セリ

三重縣 日本赤十字社三重支部ノ活動ヲ促シ豫防上必要事項ヲ大判紙ニ色刷ト爲シ理髮店、湯屋等ニ掲示セシム又巡回救護班二班ヲ組織シ蔓延甚シク治療機關缺乏ノ部落ニ於ケル豫防及治療ニ從事セシメタリ其ノ他市町村ニ於テ公費ニテ貧民部落ノ住民ニ對シ「マスク」各嗽ヲ無料配布セシムル等各種團體ノ活動アリタリ

愛知縣 名古屋市衛生總聯合會及愛知縣工場衛生會ニ於テ流感豫防「ポスター」ヲ作りテ宣傳ニ努メタル外地方青年會ノ「マスク」獎勵ニ努メタルモノニ三アルノミ

靜岡縣 大正八年十二月靜岡市内ニ流感流行ノ兆アルヤ前年ノ慘害ヲ再ヒセンコトヲ慮レ靜岡市衛生組合主催トナリ市醫師會ト連絡シ警察部、靜岡警察署並ニ市役所ノ後援ニ依リ是カ豫防宣傳ヲ開始シ第一着手トシテ丸尾同組合長ヲ始メ警察署等協力シテ大道講演ヲ以テ流感ノ恐ル可キヲ演述シ或ハ寄席、劇場活動寫真ノ幕合ヲ利用シ流感豫防ノ宣傳ヲ爲シ傍ラ「マスク」ノ即賣ヲ開始シタル處反響大ニ起リ多大ノ效果アリタリ其ノ他町村衛生組合ハ町村ヲ援ケ「マスク」ノ販賣、豫防接種ノ勸誘其ノ他印刷物ノ配布等夫々盡力シタルモノアリ

山梨縣 私立山梨縣衛生會ノ事業トシテハ印刷物ヲ各所ニ配布揭示シ豫防注意ヲ喚起セシメ又財團濟生會ノ事業トシテハ豫算五百五十圓ヲ計上シ本病ノ豫防撲滅ノ爲メ合嗽劑及「マスク」ヲ調製窮民ニ對シ配布セリ郡市醫師會ニ於テハ各郡市ト協力豫防接種ヲ勸誘シタリ

滋賀縣 公益團體ノ活動トシテハ市町村ノ衛生組合ニ於テ豫防思想ノ宣傳其ノ他組合員ノ一

部ニ對シ豫防接種ヲ施行シタルノ外特ニ活動ノ見ルヘキモノナシ

長野縣 衛生組合ハ極力豫防思想普及「マスク」獎勵、豫防接種、患死者ノ豫防消毒、貧困者ニ對スル救療等ニ努力シ特ニ流行時ニ於テ豫防事務所ヲ設ケ檢病の調査ヲ行ヒ患死者ニ對シ手當ヲ施シ又ハ樞要ノ場所ニ時々患死者數ヲ揭示シ豫防思想ノ喚起ニ努メタリ

福島縣 流行地ニ於ケル公共團體ノ活動狀況ニ關シテハ各衛生組合ハ警察官吏、役場吏員ト協力シ患者ノ檢索健康ノ觀察、豫防心得書ノ配布等豫防救治ニ援助シタル功績見ルヘキモノアリ郡市醫師會中豫防救治ニ活動シタルモノハ岩瀬、相馬等ノ郡醫師會ニシテ所轄警察官署ト協同ニ流行各地ニ衛生講話會ヲ開催シ豫防上ノ注意ヲ促シ衛生思想ノ普及宣傳ニ努メ又報酬ヲ低減シ豫防接種ヲ勵行スル等活動見ルヘキモノアリ又日本赤十字社福島支部ヘ東白河郡石井高城ノ各村ニ對シ大正九年春救護醫員二名及看護婦三名ヲ特派シ徹底的豫防救治ヲ爲シタリ其ノ他若松市小學生徒保護會ニ於テハ金三百六十圓ヲ支出シ「マスク」六千二百個ヲ購入ノ上小學生徒全部ニ給與セリ

巖手縣 赤十字社巖手支部篤志看護婦會、同愛國婦人會巖手支部ニ協議シテ其ノ活動ヲ促シタル結果家庭ニ於テ容易ニ作製シタル「ガーゼマスク」(實費約四錢位)ノ見本ヲ作製シ普ク各家庭ニ普及ノ目的ヲ以テ郡市役所、町村役場、中等學校、市内小學校其ノ他ノ官公衙並療兵及軍人遺族ニ對シ約二千個ヲ見本トシテ贈リ尙貧困者ニハ無代給與ヲナシ又希望者ニハ實費ニテ給與セリ

青森縣 各町村青年團、在郷軍人分會衛生組合ニ於テハ各戸ニ付キ豫防接種ノ勸誘及「マスク」各嗽ノ使用、豫防注意書ノ配布等ニ盡力セリ

山形縣 縣下千六百六十有餘ノ衛生組合ニ於テ當該吏員ノ指揮命令ニ從ヒ豫防心得書ノ配布

「マスク」使用、含嗽獎勵、豫防接種ノ勸誘等ニ從事セリ婦人衛生會ニ於テ「マスク」ヲ作製シ實費ヲ以テ頒布シタルモアリ

福井縣 公益團體トシテ自發的ニ活動ヲ爲シタル事實ナキモ都市町村長及警察官署長ノ採リタル豫防施設ノ趣旨ニ基キ豫防宣傳書ノ配布、豫防接種「マスク」使用ノ獎勵或ハ救護班ノ設置ニ關シ多少ノ便宜ヲ圖リタルニ過キサザル狀況ナリ

石川縣 大日本私立衛生會石川縣支會ニテハ「マスク」見本ヲ配付シ又豫防心得書五萬枚ヲ頒布シタリ又小學校生徒婦人會等ニテ「マスク」ヲ製作供給シタルモノアリ

富山縣 青年會及在郷軍人分會ニ於テハ本病豫防心得書ヲ各揭示場ニ揭示シ且戸別訪問ヲ行ヒ豫防宣傳ニ努力セリ

鳥取縣 縣並ニ郡市醫師會ニ於テハ豫防接種普及ノ爲メ接種料ヲ低減シ施行スルコトト爲シ又財團濟生會ハ縣及關係郡市町村ト協力ノ上救護班三組ヲ組織シ流行猛烈ナル町村又ハ山間僻地ニシテ醫療ヲ受クルコト容易ナラサル部落ヲ巡回シ患者ノ診察施藥及豫防接種ノ施行等大ニ患者ノ救療並豫防ニ努メ其ノ他衛生會、青年會等ノ團體ニ於テモ豫防警戒ニ關スル宣傳並思想ノ啓蒙ニ力メタル事實アルモ其ノ他ノ活動トシテ特記スヘキ事項ナシ

島根縣 鹿足郡青原村信用組合ニ於テハ流行感冒豫防接種液ヲ購入シ一人料金十五錢ニテ同組合雇醫ヲシテ施行セシメ其ノ他各地衛生組合ニ於テハ衛生講話會ヲ開催シ或ハ「ポスター」ヲ印刷配布シ豫防接種ヲ勸誘スル等專ラ豫防警戒ニ努メタリ

岡山縣 醫師會ハ豫防接種ニ盡力シ或ハ注意書等ヲ配布セリ地方青年團ハ豫防接種及患家ノ手傳ヲ爲シ又ハ「マスク」ヲ製作配布シタモノアリ

山口縣 公共團體ノ活動トシテ見ルヘキモノナキモ縣下熊毛郡伊保庄村ニ於テハ救濟會ナルモノヲ組織シ積立金ヲ以テ療養ノ途ナキ者ヲ救濟シ細民ニ對シ無料接種ヲ施行シタリ其ノ他個人ニテ私財數千圓ヲ投シ醫師數名ヲ雇入レ貧困者ニ對シ施療セルモノアリ

和歌山縣 各種公益團體ノ二三ハ自發的又ハ警察官署及町村ニ促サレ形式的ニ活動セルモノアリシモ事實上充實徹底セス何等ノ好果ヲ收ムルナク從テ特筆スヘキモノナシ

香川縣 流行性感冒豫防接種施行ニ當リ衛生組合ニ於テ之レカ接種ノ督勵並該病豫防知識ノ普及ニ努力セルモノアル外特記スヘキモノナシ

徳島縣 市町村及衛生組合ニ於テ豫防接種ノ普及督勵又ハ豫防心得書ノ配布等ニ助力セシ外活動ノ狀況トシテ特ニ記スヘキモノナシ

愛媛縣 大正八、九年流行ノ際ニ於テ縣ヨリ豫防液ヲ縣下各郡市醫師會ニ實費ヲ以テ配布シ豫防接種ヲ施行スル醫師ニ於テハ門戸ニ豫防接種施行ノ旨ヲ表記シ一般豫防接種ヲ受クルニ便ナラシメタリ財團濟生會ハ縣下ニ於ケル縣稅免除者ニ對シ無料豫防接種ヲ施行シタリ

佐賀縣 藤津郡鹿島醫師會ニ於テ大正九年ノ流行時ニ際シ豫防接種ノ必要ヲ認メ一般ニハ實費、貧困者ニハ無料ニテ之ヲ施行シ同郡鹿島濟生會ニ於テハ大正八、九年ノ流行期ニ際シ「マスク」ノ無償配布ヲ行ヒ佐賀郡市及杵島郡等ノ醫師會ニテハ貧困者ニ對シ施療券ヲ交付シ其ノ他ノ郡ニ於テモ相當救療ノ途ヲ講シ又佐賀郡内ニ於テハ村吏員ヲ補佐シ福岡市ヨリ氷ヲ貨車ニテ購入シ之ヲ各患家ニ配布セル青年會又ハ豫防宣傳ニ努メタル青年會等アリ

熊本縣 公益團體ノ活動トシテ熊本縣濟生會「マスク」百七十八分、カメレオン含嗽藥四百八十磅ヲ縣下ニ無料配布シ熊本縣衛生會ニ於テハ流行性感冒「ワクチン」豫防液七千六百五十分ヲ

縣下一般ニ無料配付シ警察部衛生課ト協力無料接種ヲ行ヒタル等主ナルモノナリ
 鹿見島縣ニ衛生組合員カ豫防心得ノ徹底ニ奔走シ或ハ全家ヲ擧ケ病臥スル家族ヲ救助スル
 外流成豫防ニ關シ五人組ノ制度ヲ設ケ規約ヲ定メテ各自衛的ノ途ヲ講シ若クハ患家ヲ救助ス
 ル等相當活動シタル地方アリ殊ニ豫防上效果顯著ナリシハ各部落間ノ交通ヲ制限シ又ハ組合
 規約ノ下ニ全然之ヲ斷チ以テ完全ニ病毒浸襲ヲ阻止セシ部落多シ
 沖繩縣 各種公益團體ニ於テ特記スヘキ活動ヲ見サルモ青年團中豫防心得ノ宣傳ヲナシタル
 モノアリ

第六章 流行性感冒ノ病原、病理、症候、治療、豫防

第一節 流行性感冒ノ病原

第一項 緒言

「インフルエンザ」ノ病原問題ハ猶ホ未解決ナリ。約三十年前既ニ確定セラレタリト信セラレ
 シ「インフルエンザ」病原カ、進歩セル微生物學ノ技術ニヨリ、多數ノ學者ニヨリテ研究セラレタル
 結果再ヒ模糊ノ迷路ニ彷徨スルノ觀アルニ至リシハ、是本病カ尋常一様ナラサル特性ヲ有スル
 カタメ、病原確定上ノ原則ヲ完全ニ充塞スルニ足ルノ檢索ヲ行ヒ難キニ因ルナリ。從テ現今學
 術ノ廣セル研究成績ヲ以テシテハ強ヒテ一ノ學說ヲ以テ他ヲ排除ス可キニ非ス。冷靜ニ實驗
 ノ成績ヲ觀察シテ其ノ何レノ說カ最モ事實ニ近キカヲ推想スルノ外アル可ラス

一度信セラレ、二度疑ハレタルブアイフェル氏菌カ今後如何ナル地位ヲ得ヘキカハ今後興味
 アル學術上ノ問題ナリ。但シ學術ニハ常ニ進歩アリ。今日諸學者ノ主張スル學說ハ必ス後來
 完成ノ基礎タル可キハ疑ヲ容レス。姑ク結論ヲ急カス、學界ノ梗概ヲ録セント欲ス

第二項 既往ニ於ケル病原研究ノ趨勢

一八八九—九一年(明治二十二年—二十四年)「パンデミー」ニ於テ其ノ病原論ノ紛糾セルコト
 ハ今次ノ流行以上ナリシカ如ク、就中肺炎双球菌ノ如キハ最モ重要視セラレタリ。ブアイフェル
 氏カ「インフルエンザ」桿菌ヲ發見報告セシハ「パンデミー」ノ末期一八九二年(明治二十五年)ニシテ

當時ノ學界ハ遂ニ之ヲ「インフルエンザ」病原トシテ承認セル所ヲ以テ考フルニ、患者ヨリ本菌ヲ檢出スルコト極メテ容易且ツ豐富ニシテ、直ニ本菌ヲ以テ病原視スルニ差支ナカリシモノナ
ル可シ。當時ト雖モ充分ナル動物實驗アリシニ非ス、免疫反應ノ検査アリシニモアラス、其ノ檢
出ノ頻度ト、病竈トノ組織的關係カ其ノ病原的意義ヲ決スルニ重要ナリシモノナリ。然ルニ爾
來「インフルエンザ」病原トシテ見ス、同時ニ「インフルエンザ」病原ト見ルコトモ甚タ稀トナリ、自然
本菌ハ歴史の病原體視セラルルノ傾向ヲ示シタリ。「バンデミー」終熄後、各地ニ流行性ニ出顯セ
ル感冒「グリッブ」ニ就テ研究セル結果、ブアイフェル氏菌ヲ發見スルコト甚タ少キカ又ハ全ク之
ヲ見ス。他方感冒以外ノ呼吸器疾患ニモブアイフェル氏菌ニ性狀一致セル菌ヲ檢出スルコト
稀ナラサルヲ以テ、ブアイフェル氏菌ノ病原的意義ハ漸ク疑問トスルモノ多クナレリ。即チ「エ
ビデミー」性感冒ハ「バンデミー」性感冒（インフルエンザ）トハ全然別種ノ疾患ナルカ、或ハ又「エビデミ
ー」性感冒モ「バンデミー」性感冒モ共ニブアイフェル氏菌トハ病原的關係ナク、而シテ所謂ブアイ
フェル氏菌ナルモノハ單ニ健康者口腔ノ常存性非病原性菌トナス可キカヲ論スルニ至レリ。
其ノ間再ヒ肺炎双球菌、連鎖球菌ノ類ヲ目シテ地方性流行感冒ノ原因ト考フル者生シ、又クル
ゼ、フオスナル等ノ如ク感冒ノ原因ヲ濾過性ナリト信スル者顯ハレ、從テ「インフルエンザ」病原
モ或ハ然ラントノ説ヲ抱クモノアリ。兎ニ角眞正ノ「インフルエンザ」ニ遭遇シテ、之
トブアイフェル氏菌トノ關係、濾過性病原體ノ有無等ヲ實際ニ研究センコトハ大ナル興味ヲ以
テ期待セラレタル所ナリキ

今次ノ流行カ眞正ノ「インフルエンザ」ニシテ、一八八九—一八九一年（明治二十二年
二十四年）ノ「バンデミー」ト一致スルモノナルコトハ毫モ疑ナキ所ナルカ、本流行ニ於テ、若シ嘗テ

ブアイフェル氏ノ報告セル如クブアイフェル氏菌ヲ常ニ豐富ニ檢出シタランニハ學界ニ異論
ヲ生セサリシナル可ク、又他ノ地方的流行ノ感冒ニ於ケル如クブアイフェル氏菌ヲ見ルコト殆
トナカリシナランニハ學者ノ態度ヲ決スルコトモ容易ナリシナランニ、事實ハ豫期ニ反シテ恰
モ不離不着ノ邊ニ徘徊セリ。加フルニ濾過性病原ヲ以テスル感染實驗ハ猿或ハ人體ニ於テ殆ト
全ク失敗セルヲ以テ、濾過性病原ヲ説クモノモ、ブアイフェル氏菌ヲ主張スル者モ何レモ最モ重
要ナル支點ヲ失ヒ、徒ラニ其ノ好ム所ニ從テ論難スルノ嫌ナキニ非ス。要スルニ何レノ學說モ
許容シ難キ難點ヲ脱却セサルヲ以テ學者ノ意見一致スル能ハサルモノナルコト明カナリ

- 「インフルエンザ」病原ニ關スル研究ヲ綜括センニ
- (一) ブアイフェル氏菌ヲ原因トナスモノ
- (二) 原因不明ナルモブアイフェル氏菌ニ特殊ノ病原性ヲ認ムルモノ
- (三) ブアイフェル氏菌ハ爾他ノ菌、肺炎双球菌、連鎖狀球菌、加答兒性双球菌等ト同様單ニ二次的
侵入者ニ過キストナスモノ
- (四) 種々ノ菌類カ共同シテ病原作用ヲ營ムト考フルモノ
- (五) 濾過性病原體ヲ信スルモノ
- (六) 特殊ノ病原體ヲ發見セルモノ

等アリ。病原體トシテハブアイフェル氏菌ヲ尊重スルモノト、之ヲ却ケテ原因不明トナスモノ
最モ多シ。原因不明ト考フル者ノ多クハ超顯微鏡性病原體ノ存在ヲ信スルモノノ如シ

第三項 各國ニ於ケル研究成績

以下各國ニ於ケル研究成績ヲ略叙ス可シ

一、日本

大正七年秋インフルエンザ「パンデミー」ノ本邦ヲ襲フヤ細菌學者ハ直ニ研究ニ着手シ、北里研究所ノ大河原氏以下ハ大正七年十一月十六日ノ學會ニ於テ鼻腔粘液及咯痰ノ細菌學的研究ト患者血清ノ免疫反應検査ノ成績ニ基キ、フ氏菌ヲ以テ「パンデミー」ノ原因ナリト報告セリ。十一月二十日ニハ京都及大阪ノ兩博學會ニ於テインフルエンザ病原研究ノ發表アリ。京都大學豊島、關兩氏ハ双球菌ト共ニ「グラム」陰性小桿菌ヲ檢出シテ兩者共ニ病原的意義アリトセシカ、此ノ桿菌ハ普通寒天ニモ發育スル點ニ於テフ氏菌トハ異ナルモノナリキ。後藤氏ハ九一%ニフ氏ヲ檢出シテ之ヲ病原ニ擬シ、京都醫專岡氏ハフ氏菌ヲ多數ニ檢出スルノミナラス、患者血清トノ間ニ喰菌現象陽性ナルヲ以テ本菌ノ病原的意義ヲ信セントス。大阪ニ於テハ佐多氏ハフ氏菌ヲ二五五%ニ培養セルモ之ヲ以テ口腔常在性ノ非病原菌トナシ、インフルエンザノ病原ハ不明ナルカ肺炎双球菌ノ一變種ナル可シト論セリ。十一月二十四日ノ東京ノ學會ニ於テ傳染病研究所石原氏等ハフ氏菌ヲ檢出スルコト六八%ナルモ免疫反應陰性ナルヲ以テ病原ト斷スル能ハスト報告シ、東大ノ山極氏、川北氏等ハ病理解剖所見ニ基キフ氏菌及「グラム」陽性双球菌ヲ見ルモ、双球菌ハ常ニ見ラルル菌ニシテ流行ニ特殊ノモノニ非ス。フ氏菌ニ病原的意義アルカ如キモ未タ之ヲ斷定スルヲ得ストナセリ。

東北大學ノ中村、大平兩氏ハフ氏菌ニ發スルモ、之ヲ病原ト斷定スルニハ動物實驗及免疫反應ノ成績餘リニ充分ナリトシ、九州大學ノ金子氏等ハ同様ニフ氏菌ヲ病原視セルモ免疫反應ノ著明ナラサル點ニ就テ病原ノ論定ヲ避ケタリ。南滿醫學堂ノ豊田、島田兩氏ノ十二月十四日ノ發

表ニヨレハ、フ氏菌、肺炎双球菌、粘液性連鎖狀菌等ノ各カ一次の病原タルコトノ可能ヲ説キ、「パンデミー」ニ於テハフ氏菌重要ナランモ他ノ菌ヲ主因トスル感冒ノ流行モ混在スヘシト稱セリ

爾來北里研究所ニアリテハフ氏菌病原說ノ論據ヲ固メ大正九年十二月十九日ニ綜合的報告ヲ行ヘリ。其ノ所說ヲ摘出センニ適當ナル技術ト材料ヲ以テスレハ患者ヨリフ氏菌ヲ檢出スル率極メテ高キコト、患者屍體ノ肺其ノ他ヨリ檢出セララルコト、フ氏菌及其毒素ヲ以テセル動物實驗、患者ノ白血球減少症ト實驗的白血球減少トノ一致、各種免疫反應、凝集反應、補體結合反應、喰菌現象、菌ノ溶解現象等ニヨリテフ氏菌ノ病原的關係ヲ信スト云フ

傳染病研究所ハ病原不明說ヲ持シテ論ラス。論據ハフ氏菌ニ病原タルノ確證ナク、其ノ他未タ信スルニ足ルモノナキモ、從來上ケラレタル細菌以外ニ未知ノ病原體アルヲ想像シフ氏菌、肺炎双球菌ヲ以テ二次的侵入者トシテノ意義最モ大ナルモノト認定セリ

本邦ニ於ケルインフルエンザ病原ニ關スル意見ハフ氏菌說ト未定說トフ氏菌ヲ否定シ、麻疹、猩紅熱等ニ類スル特殊ノ病原ヲ想像スルモノノ如シトノ二者ヲ主トシ、他ニハ有力ナル異說ナシ。石原房雄氏ハ衛生學傳染病學雜誌第十六卷、第一號、大正九年十月ニ於テ濾過性實驗ニ就テ記シ、患者濾液ノ動物實驗ハ全ク陰性ニ終リシカ、唯患者咯痰ノ濾汁ヲ「インフルエンザ」ニ罹リシコトナキ健康人皮下ニ注射スルニ二三日ノ潜伏期ヲ以テ發熱スルヲ見タリ、但シ結核咯痰ノ濾液ヲ注射スルモ多少ノ苦悶ハアリト云フ。濾過液ヲ吸入、咽喉ニ塗布スル法ハ石原氏モ、北里研究所大河原氏ノ報告モ陰性ナリ。石原氏ハ又患者血清ニ喰菌率ノ増加ヲ認メス、又フ氏菌以外ノ諸種ノ菌ト雖「マウス」ニ於テ肺及脾ニ出血ヲ以テ動物實驗上ノ出血性變化ヲフ氏菌ノ特異ノ變化ト考ヘス。以上ノ理由ニヨリフ氏菌ヲ「インフルエンザ」ノ病原トスル論據ナシトセリ

患者及恢復者血清トブ氏菌トノ免疫反應ニ就テモ、大谷、矢部、三原北研、伊藤京都市立病院常岡(京都醫專等ハ陽性ノ成績ヲ上ケ、工藤海軍、鈴木臺灣、松波傳研等ハ疑ハシキ成績ヲ上ケタリ。本邦學者ノインフルエンザニ關スル業績ハ一括シテ別ニ之ヲ表示ス可シ

内外ニ於ケル研究成績ニ基キ之ヲ大觀スルニ、インフルエンザ「パンデミー」ハ其ノ原因不明ナルト同シク、其ノ病原モ亦未タ確實ナル論定ナキモノナリ。學者ノ主張ニ相當ノ證據ヲ有スルコトハ明カナルモ、完全無缺ナル證明ナキ限り、批難ナキ病原論ヲ以テ許ス可ラス。獨リ人體ノミカ感受性ヲ有シ、而シテ地球上ノ全人類カ殆ト皆其ノ病毒ノ侵襲ヲ受ケ、或ハ輕ク、或ハ重ク「インフルエンザ」ヲ耐過シ、一定度ノ免疫カ全人類ニ賦與サレタリト考フ可キ今日ニ於テ、インフルエンザ「病原ノ感染實驗ハ恐ラク希望ス可ラサルモノナラン。假ニ少數ノ實驗ニ於テ、インフルエンザ」様ノ症候ヲ發生シタラン場合ニモ、之ヲ真正ノ「インフルエンザ」ナリト診定スルコト恐ラク不可能ナル可シ。病原論ノ眞ノ解決ハ次期ノ「パンデミー」マテ待ツヲ要スルモノニ非サランヤ

二、獨逸

「ブライフェル」ヲ有スル獨逸國內ニ於テモ「ブライフェル」氏菌ハ贊成者ノミヲ發見セス。之ヲ多數ニ發見シテ病原的意義ヲ疑ハサルモノアリ。之ヲ屢々見ルモ「パンデミー」ノ原因ヲ疑フモノアリ。全ク之ヲ檢出セサルモノアリ。濾過性病原體ヲ主張スル者アリ。決シテ歸着スル所ナシ

Fromme (Deutsch. Med. W. Dec. 12 1918)「ハモグロビン」寒天ヲ使用スルトキハ「ブライフェル」氏菌ノ檢出容易ニシテ或ハ「フステニン」ブラッチニテモ其ノ集落ヲ得ルコト容易ナルヲ説キ、疾患ノ初

期ニ於テ「叮嚀」ニ檢査スルコトヲ必要トシ、後期ニアリテハ二次的侵入菌ノタメニ壓倒サルル惧アリ。凝集反應ヲ行フニ「ブライフェル」氏菌ト患者血清トノ間ニ陽性成績ヲ見ルト云フ。 Reichle 氏「インフルエンザ」屍ノ肺ヨリ六〇%、脾ヨリ一七四%ニテ「ブライフェル」氏菌ヲ培養セリト云フ

Materna u. Penck (Wien. Klin. W. 1918. S. 1221)「細菌學的檢査」ノ結果「インフルエンザ」屍ノ七四%ヨリ「ブライフェル」氏菌ヲ發見シ、他ノ菌ハ呼吸器ノ炎衝性變化ニ常在スルモノナルヲ確メ、 Baumann, Dietrich, Schlemann, Simmonds, Uhlenhuth 等ト共ニ一九一八年(大正七年)「グリッブ」ノ原因ヲ「ブライフェル」氏菌ト認メタリ

Scherheim u. Novakovic (Munch. m. W. 1918. S. 1873)「ブライフェル」氏菌說ニ贊シ、ブ氏菌ハ一八九四年後之ニ遭遇スルコト殆ト例外トモ云フ可キニ、今次ノ「パンデミー」ニ際シテハ之ヲ發見スルコト甚屢々ナリ。時ト場所トニヨリテ「ブ氏菌」發見率ニ差違アルモ、瑞西ニ於テハ七月ニ比シ十月ノ流行ニ於ケル「ブ氏菌」檢出スルコト多シ。ブ氏菌ハ疾病ノ初期ニ多ク檢出セラレ。又患者血清及恢復者血清ハ「ブ氏菌」ニ向ツテ免疫反應ヲ呈スルコト多シ

Leichtenritt. (Deutsch. m. W. 1918 S. 1419)「顯微鏡檢査」ニ於テモ多數ノ例ニ於テ「ブ氏菌」ヲ略痰中ニ發見シタリ。 Leivthal ノ「ハモグロビン」寒天ヨリモ「ブライフェル」氏菌ノ鳩血液ヲ用フル原法カ結果ヲ良好ナラシム。二一七ノ略痰中五一六%ニ「ブ氏菌」ヲ證明シタリ。時ニ結核ト見做レシ症狀ヨリ「ブ氏菌」ヲ發見スルコトアリ。解剖ノ場合ニハ大部分ヨリ「ブ氏菌」ヲ檢出シ、時ニ純粹培養ヲ得タリ。時ニ脾臟ヨリ「ブ氏菌」ヲ證スルコトアリ

Newfeld u. Papamarku (Berl. W. 1919. S. 9)「ロズインター」氏培養基ヲ用ヒ、略痰、扁桃腺、肺、氣管支腺、

腦ヨリブ氏菌ヲ培養ス。又ブ氏菌ノ凝集反應ヲ見ルコト屢々ナレトモ、之ヲ診斷上ニ應用スル程度ニ非ス

屢々肺炎双球菌加答兒性双球菌連鎖球菌ノ混合感染アリ、此等ノ菌ハ少數ノブ氏菌ノ檢出ヲ困難ナラシムルコト少カラス。又流行時外ニブ氏菌ヲ發見スルコトアルモ、其レカタメニブ氏菌ノ病原的意義ヲ輕ンスヘキニ非ス

適當ナル試驗動物ナキタメニ菌力及ヒ毒性ヲ明ニスルヲ得ス。又往々百日咳菌、*Bac. haemophilus canis* 等ノ類似菌ト區別シ難キコトアル可シ

二十五人ノ健康者ヲ檢シテ二人ノ保菌者ヲ發見シタリ

Messerschmidt, Himmelhagen u. Schaefer (Zeits. f. Hyg. u. Inf. Kr. 1919, Bd. 8, S. 552) カ一九一八年(大正七年)ストラスブルグニテ行ヘル細菌學的研究ノ結果ハ六月七月ノ流行ニテハブ氏菌ヲ檢出スルコト四八・九%、九月十月ニテハ九〇%ナリ。健康者及他ノ疾患ニハブ氏菌ヲ見ス。本菌ヲ診斷スルニハ其ノ形態ノ外、血色素含有ノ培地ニ葡萄糖ヲ加フルトキ之ヲ分解シテ酸ヲ作ルモ、乳糖、蔗糖「マンニット」ニテハ酸ヲ作ラス。死後數時間ニテ解剖セル場合ニハ肺、肝、腎ニモ本菌ヲ證シ、全眼球炎ヨリ之ヲ檢出シタル場合アリ。他ニ確實ナル病原菌ナキ以上ハブ氏菌ノ病原說ヲ否定シ難シ

Mollers u. Bernhard, (Berl. Kl. W. 1919, S. 1081) ハ今回ノ「パンデミー」ヲ以テ定型的「インフルエンザ」トナシ、流行病原、臨床學、病理解剖學ヨリ見テ以前ノ流行ニ一致スルヲ見ル。ブ氏菌ノ病原的意義ハ充分ト稱シ難ク、寧ロ溢過性病原ノ存在モ推想セラレサルニ非サルモ、本病ニブ氏菌ヲ屢々發見スルコトハ其ノ間重要ナル關係アルヲ示スモノナリ

近頃顯ハレタルブ氏菌發成者トシテハ

Newfield氏 (Deutsch. m. W. 1920 Nr. 35) 曰ク、ブ氏菌カ「インフルニンザ」ノ病原トシテ不充分ナリトノ議論ハ内外國共ニ聞ク所ナルモ、其ノ論據ハ「(一)確實ナル「インフルニンザ」ニシテブ氏菌ヲ見サルコト、(二)屢々他ノ疾患ニモ見ラルルコト、(三)不可視性病原體ノアリ得ヘキコトノ三點ナリ。然レトモブ氏菌ヲ證明スルコトハ其ノ検査精密ナレハ之ヲ見ルコト甚タ多シ。反覆検査スルコト、材料ヲ各所ヨリ取ルコト等ニヨリテ、疾病ノ何レカノ時期ニ、上氣道若ハ肺ノ何レカノ部ニブ氏菌ヲ證シ得ヘシ。但シ疾病ノ後期ニ於テハ口腔ニ常在セル肺炎菌其ノ他ト混シ、之カタメニ壓伏セラレ、此等培養容易ナル菌ニヨリテブ氏菌ノ檢出甚タ困難トナルハ當然ナリ。又技術ニモ關ス。即チ Wassermann ノ所謂 *wo Influenza, da Influenzabacillus* ナルモ其ノ反對ニ *wo Influenzabacillus, da Influenza* ト云フヲ得ス

第二ニブ氏菌ハ他ノ疾患ニ、且ツ「インフルニンザ」ナキ時期ニモ之ヲ見ルコトアルハ事實ナルモ、此レカタメニブ氏菌カ病原菌ナラストナスハ恰モ肺炎双球菌カ健康口腔ニアルカタメニ肺炎ノ病原菌ニ非ストナサンカ如シ。肺炎双球菌ハ寒冒其ノ他粘膜ヲ損傷スル機會ニ乘シテ肺ニ侵入シ増殖シテ *Pneumokokken-Pneumonie* ヲ起スモノナリ。連鎖球菌、葡萄狀球菌等カ動物通過ニヨリテ非常ナル菌力高上ヲ來スコトアリ。豚丹毒、雞「ベスト」フ如キハ健康ナル動物ニ存スル菌カ俄然菌力高マリテ流行ヲ來スコトナキニ非ス。ブ氏菌モ亦時ニ健康ナル粘膜ニ發見セララルコトアル可キモ決シテ常在性ノ菌ニ非ス。又「インフルニンザ」流行時ニ於テスラ麻疹ニ四七%百日咳ニ二九%ヲ見タルニ過キス。腦膜炎菌ニテモ同様ニシテ、菌力高マルトキ流行ヲ生スルナリ

第三ノ濾過性病原體ニ關スル報告ハ何レモ論證甚タ薄弱ナリ。此レカタメニブ氏菌ヲ以テ病原ニ非ストナスノ要アル可ラス

Otto Olsen 氏ハ最近ノ報告ニ於テ (Centbl. f. Bakt. etc. Org. Bd. 84 H. 7/8) 述ヘテ曰ク、今回ノインフルエンザ流行ニ際シ顯ハレタル多數ノ業績ヲ通覽スルニ、連鎖球菌及肺炎双球菌等ヲ以テ二次的侵入者ト見做スコトハ一般ノ承認スル所ナルモ、ブ氏菌ニ關シテハ意見區々タリ。ブ氏菌ニ重キヲ置ク學者ハ Pfeiffer, Uhlenhuth, Gotschlich, Schürmann, Sinnonds, v. Bergmann, K. Jampfer, Dietrich, Neufeld, Papunarku, Leichtentritt, v. Hisslin, H. Fränkel, Fromme, Korbach, Mahlo, Eugen Fränkel, Osen, Zeissler, Messerschmidt, Hundeshagenscher, Sobornheim u. a. ニシテ、ブ氏菌ヲ輕ムモノニハ Mandelbaum, Hirschbruch, Selzer, v. Gruber, Kollé, Frickebaum, Bernhardt, Bernhardt-Meyer, Schottmüller, Grätzfriedberger-Kontzer u. a. アリ。オルセン氏ノ實驗ニヨレハ二二一例ノ剖檢例中ブ氏菌ヲ見タルモノ一六六(七五%)連鎖球菌一二五、葡萄球菌一〇七、肺炎球菌五〇ナリ。ブ氏菌ノ陽性率ハ検査ノ精疎ニヨリテ大ニ差ヲ生スヘシ。元來ブ氏菌ハ培養困難ナルヲ以テ七五%モ檢出シ得ルコトハ病原菌トシテ充分ナル可シ。且ツ肺病竈ノ新鮮ナル部ニ之ヲ檢出スルコト多キモ其ノ病原性ヲ證スル一助タラン。即チブ氏菌ハ先ツ侵入シ、他ノ菌ハ之ニ續キテ來リ却ツテブ氏菌ヲ壓倒スルモノナルヘシ

Engel (Wien, Kl. W. 1920, S. 453) ハ患者血清ノ六〇%ハブ氏菌トノ間ニ補體結合反應陽性ニシテ、肺炎ヲ起セル者ハ殆ト全部陽性ナリ。下熱スレハ反應消失ス。肺炎、結核等ニテ陽性ノコトアレトモ「チフス」ニテハ全ク陰性ナリ

以上ハブ氏菌賛成者ノ意見ヲ述ヘタルモノナレトモ、ブ氏菌ニ反對スルモノニハ上記オルセ

ン氏ノ報告中ニモ舉ケラレタル如ク多數ノ専門學者アリ。一例トシテ Schottmüller (Deutsch. m. W. 1919, S. 795) ノ意見ヲ抄出センニブ氏菌ハ麻疹、百日咳ノ壞疽性氣管支肺炎病竈ニ屢々見ラレ、又氣管支擴張症ノ咯痰中ニ每常發見セラレ。又流行時外ノ心内膜炎、腦膜炎ヨリ屢々發見ス。而シテ流行時外ニアリテハブ氏菌存在スルモ「インフルエンザ」特有ノ病變ヲ起スコトナシ。故ニブ氏菌ヲ以テ「インフルエンザ」ノ原因ト認ムルコトヲ得スト

ブ氏菌以外ノ細菌ヲ以テ「インフルエンザ」ノ病原ニ擬セシ者モ少カラス、今其ノ二三ヲ舉クレハ
Wiesner (Wien, Kl. W. 1918, S. 1303) ハ患者咯痰及屍體ノ血液及各臟器ヨリ多形性ノ双球菌ヲ培養シ得タリ。肺炎双球菌ニ類似セル菌ニシテ「カプセル」ヲ有シ、多クハグラム染色陽性時ニ短キ連鎖ヲナス。「モルモット」ニ對シテ病原作用アリ、敗血症ヲ以テ倒ス。Bernhardt (Med. Klinik, 1918, S. 683) ハ患者四十七例ヲ檢シテブ氏菌ヲ全ク見ス。之ニ反シテ全例中 Diplo-strepto-kokken ヲ見ル。此ノ菌ハ極メテ微細ナル集落ヲ作りテ形ヲ變シ易シト云フ。又 Teiner ハグラム染色陰性ノ Diplo-strepto-kokkus ヲ病原トナセリ

濾過性病原ヲ主張スル者モ少カラス。Selzer (Deutsch. m. W. 1918, S. 682) ハ種々ノ材料ニツキ最モ適當ナル検査條件ノモノトニ検査セルニ皆テブ氏菌ヲ見ス。故ニブ氏菌ハ「インフルエンザ」ノ原因ト信スル能ハス。ヘルンハルトノ Diplo-strepto-kokkus モ甚タ少シ。恐ラク病原體ハ不可視性ノモノナル可ク、クルーゼモ同一意見ヲ有セリ。新鮮ナル患者ノ咽喉粘液、含嗽水ヲトリベルゲフェルド濾器ニテ濾シ、之ヲスプレーヲ以テ自身及助手ノ口中ニ散布吸入セシニ兩人共二十七日乃至二十日後輕症ノ「インフルエンザ」様ノ症候ヲ呈シタリ

Angerer (Munch. m. W. 1918, S. 1280) 「インフルエンザ」患者ノ血清ヲ「ラツテ」ニ注射セルニ發病セリ。其ノ血液ヲ陶製濾過器ニテ濾過シ、葡萄糖、ブイヨン「培地」ニ植エタルニ一種ノ微小ナル生物ヲ得タリ。患者血清ヨリモ同一物體ヲ得テ病原的意義アルモノト考フ

Frischer u. Konitzer (Med. Kl. 1919, S. 108) 「インフルエンザ」流行ノ初期ニアリテハ Diplostreptococcus ヲ見タリシカ、後來フ氏菌ヲ多ク見ルニ至レリ。或ハ濾過性病原體ノ存在ヲ考ヘ動物實驗ヲ行ヒタルモ陰性ノ結果ヲ得タリ。氏等ハ思ヘラク、上記ノ二菌ハ第一ノ病原ニ非ス。他ニ未知ノ毒アリテ其ノ病原作用ヲナシ、其ノ結果トシテ各種ノ菌ノ二次的侵入ヲ見ルナラント Frisch, Tschelke, Fejes, Gruber u. Schmidt 等モ同様ノ意見ヲ有ス

Prin (Zeits. f. Hyg. u. Inf. 1920, Bd. 50, S. 55) ハ一九一八年(大正七年)流行ノ「インフルエンザ」ニ就キ論シテ曰ク、其ノ病原ハ不明ニシテ acute Toxicæmia ヲ主ナル症候トシ、感染カ著シク、屢々世界的大流行ヲ來シ、殊ニ青年ヲ犯ス傳染病ナリ。傳染ハ小滴傳染ニヨリテ直接人ヨリ人ニ傳ハル。不明ナル病原體ハ先ツ氣道ノ粘膜殊ニ氣管ノ下部ニ附着シ分泌著シカラスシテ表皮細胞喪失ヲ伴ヘル加答兒性炎症ヲ起シ、又病毒ノ一部ハ恐ラク血行中ニモ入ルコトニヨリテ中毒症狀及粘膜漿膜ノ出血傾向ヲ生スルナラン。本病病毒ハ細氣管支ニ於テ focus minoris resistentie ヲ形成シ、種々ノ化膿性細菌就中連鎖球菌及フ氏菌ノ侵入發育ヲ促シ、又全身ノ抵抗力減退スル結果、肺ニハ化膿性ノ合併症ヲ起シ、敗血症、膿毒症ヲ起スコト屢々ニシテ「インフルエンザ」其者ハ良好ナル經過ヲトル可キモノナルニ拘ハラズ、合併症カ之ヲ惡化スルナリ。混合傳染ヲ起ス細菌ハ場所ニヨリテ異ル。又合併症ヲ起セル局所ノ状態ニヨリテ經過ヲ異ニス

フ氏菌ハ二次的侵入者ナリ。其ノ「インフルエンザ」ノ原因的價値ハ未タ論證セラレズ。「インフルエンザ」ノ病態ニ之ヲ缺クコト、場所ニヨリテ本菌ヲ見サルコト、又見ルモ其ノ檢出率ニ大差アルコト、病原ヲ異ニスル他ノ疾患ニ之ヲ見ルコト、又疫學的ニフ氏菌ノ關係ヲ認メサルコト等ニヨリフ氏菌ノ「インフルエンザ」病原説ハ成立セス

Olsen u. Hans (Med. Kl. 1918, S. 1032) 同様ノ意見ヲ持シ、「インフルエンザ」ニ局所症候ト一般的中毒症狀トヲ分チフ氏菌ハ流行ノ末期ニ之ヲ檢出スルコト多クナレルモ、未タ原因的關係ヲ立證スルヲ得スト云フ

更ニ特殊ノ病原ヲ新ニ建設セント欲スル者アリ。前出アンゲレルノ濾過性微生物ノ培養ノ如キモ其ノ一ナレトモ Hinder u. Prell (Munch. m. W. 1918, S. 1307 u. 1307) ハ肺ノ切片標本ニ於テ、血管ノ周圍ノ Salsivale 中ニ群集セル圓形ノ小體ヲ認メタリ。此ノ小體ハ球菌ヨリモ遙ニ小ニシテ排列ノ模様ハ蛙ノ卵巢ノ觀アリ。之ヲ「インフルエンザ」肺ニノミ特ニ發見シタリ。之ヲ檢出スルニハ鐵「ハマトキシリン」及「ギムザ」染色ヲ可トス。グラムニ染色セス。此ノ小體ハ細胞外ニ生存セル「クラミド」ト「オア」ニシテ之ニ Acnignophana influenzae ト命名セリ、但シ此ノ小體カ果シテ「インフルエンザ」眞ノ病原ナリヤ、他ノ混合性細菌ノ寄生ト關係アルモノカ決定セラレズ。此ノ小體ハ恐ラク淋巴系統ニ散在スルコトナランカ血液培養ニヨリテ之ヲ證明シタリ。アンゲレル氏ノ濾過性培養モ同一物ナランカ培養等トシテハ葡萄糖、ブイヨンヲ使用ス

Prell (Zeits. f. Hyg. u. Inf. 1920, 10 März) ハ再ヒ記述シテ曰ク、フ氏菌病原説ハ未タ完璧ト云フ可ラス。Angerer, Prell, Tschelke 等ハ患者ノ血液、肺浸出液、又咯痰ノ濾液ヨリ微細ナル顆粒ヲ培養シタリ。但シ此小體ノ病原的意義ハ確定セス

他ニ濾過性病原體ノ存在ヲ主張スル者アレトモ、未タ成功セルモノナシ。ブレル氏等ハ組織

的検査ニ於テ特殊ノ顆粒 *Aeruginophasma influenzae* ヲ検出シタルモノニシテ之ニ病原的意義ヲ置カント欲ス

三、佛蘭西

聯合國衛生會議ノ記録ニ顯ハレタル如ク、佛國ニテハ細菌學界ノ者宿ル(パスツール研究所) 濾過病原説ヲ信シ、同所員ニコル氏ノ濾過病原實驗ハ兎ニ角インフルエンザ研究上ノ一權威タルノ觀アリテ大勢ハブアイフェル氏菌ヲ信セス。又病原ニ關スル實驗的研究モ有力ナルモノヲ見ス

Nicolle et Labilly (Ann. de Inst. Pasteur 1910, p. 395) ハ「グリツプ」患者ヨリ得タル氣管支分泌物ヲ其ノ儘二頭ノ猿ニ注射シシヤムペランL 12 ニテ濾過セルモノヲ二人ノ人體ニ接種セリ。猿ハ結膜下及鼻腔ヨリ接種セルニ發熱セリ。皮下注射ニテモ發病ス、脈管注射ニテハ感セス。發病セル猿ノ血液ヲ人ニ注射シテモ發病セザルヲ以テ、血中ニハ病原體存在セサルカ如シ。「インフルエンザ」病毒ハ濾過性ナリト信ス。又患者咯痰ヲ乾燥セシムルトキハ病原作用ヲ失フ、即チ抵抗大ナラサルモノナリ。「インフルエンザ」肺炎ニハ「スピロヘーテ」ヲ見ルコト屢々ナリ。ブ氏菌ヲ見ルコトハ甚タ稀ニシテ且ツ濾液中ニ移行セス

Dujaric de la Riviere (Compt. r. Ac. S. 21 Oct. 1918) ハ四名ノ重症患者ヨリ血液二〇坵ヲトリ、五坵ヲ培養ニ供セルニ全ク陰性ナリ。殘部ヲ混合シテシヤムペラン濾器ニテ濾過シ、自身ニ四坵ヲ注射スルニ局所ニ反應ナシ。三日目ヨリ輕度ノ「インフルエンザ」症狀ヲ呈ス。後ニ至リ患者ノ咯痰ヲ生理的食鹽水ニ浮游シテ鼻口ニ塗ルモ發病セス。即チ免疫ヲ得タルモノナリ
Orliconi et Karbia (Press. med. 1919, p. 347) ニヨレハブ氏菌ハ「モルモット」ニ毒性ナリ、咯痰濾液モ無

毒ナントモ、兩者ヲ混スレハ猛毒トナル。ブ氏菌ハ二次的侵入者ニシテ病勢ヲ強ムルモノナラシカ。一九一八年大正七年夏馬ニ *Pseudogemmae* ノ大流行アリ、其ノ重症ノ時ハ血液中ニ *Coccobacillus* ヲ見ル。同様ニ「インフルエンザ」ニアリテモ血液中ニブ氏ノ *Cocco-bacillus* ヲ見ルハ豫後ノ不良ヲ示スモノナリト考ヘラル。オルチコニ氏ハ本病ニ罹リテ恢復セル馬ノ血清ハ「インフルエンザ」ノ治療ニ有效ナリトセリ

Koussy (Bull. de l'Ac. M. 1918 3 Dec.) Trillat (B. Ac. de M. 1918 23 Oct.) 等モ濾過性病原體ヲ信ス。濾過性病原體以外ノモノヲ舉クルモノニハ

Kappin et Souffre (C. r. S. Biol. 1918, 12 Oct.) ハ甚タ小キ「コロバシルス」 $1/2$ ミクロン $1/10$ ミクロン) ニシテ双球菌狀ノ菌ヲ分離シタリ。「カプセル」アリ、「グラム」陽性ナリ。甚ダ繊細ナル集落ヲ生ス。此ノ菌トブ氏菌ハ混在セルヲ以テ兩菌種ヲ混シテ「ワクチン」療法ヲ行ハントス

de Verbizier (Bull. d. Ac. M. 1918, 8 Oct.) ハブ氏菌多ク見ル。連鎖球菌ト肺炎双球菌トノ外ニ「スピロヘーテ」アリ。此ノ者症狀ヲ憎惡スルコトナキヤ
Jong et Maigne (Paris-méd. 1917, p. 286) ブ氏菌ノ病原性ハ疑ハシク、肺炎双球菌、加答兒性球菌、四聯球菌等カ病原的意義ヲ有スルナラン。屬「チフス」様ノ熱型ノ患者ニ肺炎双球菌敗血症ヲ發見スルコトアリ

Cazal (Compt. r. Soc. Biol. 1919, p. 204) ハ六九例ノ患者血液ヲ培養セルニ一例モブ氏菌ヲ得ス。肺炎双球菌一三例、連鎖球菌二例、葡萄狀球菌、肺炎桿菌等各一例ヲ發見セリ

Marguerite Aitoff (Compt. r. Soc. Biol. 1918, p. 574) 患者二八例ヨリブ氏菌ヲ常ニ見、又肺炎双球菌ノ連鎖型ノモノヲ常ニ發見ス。以上ノ兩菌ハ共棲作用ヲ營ムモノナルヲ以テ菌力ヲ高メ合フコ

トハ可能ト考ヘラン

Neter (B. d. Ac. M. 1918, Oct.) ハ二六例ノ咯痰中ヨリ一六例、六例ノ肺浸出液中ヨリ四例、肺穿刺液ヨリ八例、十例ノ肋膜液中ニ一例、血液十二例中二例ニブ氏菌ヲ檢出セリ。ブ氏菌ハ時ニ純粹ニアリ、又ハ肺炎双球菌及連鎖球菌ト混ス。細菌學的檢査ノ結果ブ氏菌ヲ見スト云フモノアルモノハ誤ナリ。但シブ氏菌ノ病原的價値ニ就テハ異論少カラス

四、伊太利

II pollicinico (1918, 28, July) 誌ニ論シテ曰ク「インフルエンザ」流行カ西班牙ヨリ生レリト云フハ疑ハシ。其ノ病症モ不正確ニシテ往々「デング」「ババタシ」熱、墮壕熱等ト混合セラレ。五月、六月ニ於ケル流行ハ神經症狀胃腸症狀ナリ、又肺炎ヲ起スコトナキヲ以テ前回ノ「インフルエンザ」流行ト異ナルモノト考フル學者多シ。臨床上「インフルエンザ」ナリト主張スル者モアリ。病原體トシテ「アトラゲヌス菌」ヲ發見セル者アリ。又特殊ノブ氏菌ヲ檢出セル者モアレトモ、未タ眞ノ「インフルエンザ」ト決定スルヲ得ス。Influenza nostras トモ稱ス可キモノカ

即チ春夏ノ流行カ極メテ輕症ナリシヲ知ル可シ。但シ秋期ニ於テ重症ナル「インフルエンザ」發生セルヲ以テ種々ノ病原體發見報告セラレタリ。一九一八年(大正七年)十一月十日ノ「ボリク」リニコ「誌」ニヨレハ「Tianri et Igucallo」ハ血液ノ咯痰、尿中ニ一種ノ双桿菌ヲ見、Matsumi et Pameka ハ血液ヨリハ肺炎双球菌ヲ、化膿性氣管支炎ヨリハ連鎖球菌、葡萄狀球菌、肺炎球菌ヲ見タリ。Palmieri ハブ氏菌ヲ見ルコト稀ニシテグラム陽性双球菌ヲ多ク發見ス。Portano 濾過性病原ヲ信ス。彼ハ一八九〇年明治二十三年ノ流行ニ於テモブ氏菌恐ラク病原的作用ヲ有セサリシナラント稱スルモ他ノ Vassia Canalis, Ghaxa, Commission scientifique 等ハブ氏菌病原說ヲ主張ス。Tingano (pollicinico 19

(Ev. 1915) ハブ氏菌ノ肺炎双球菌四聯菌ヲ見、Morsch (pollicinico, 1 Mars 1915) ハ濾過性病原ノ實驗ニ成功セス、Carpano ハブ氏菌ヲ信シ、早期ニ見レハブ氏菌必ス存在スルコト、一定度ノ動物實驗ヲナシ得ルコト、其ノ菌體變化シ易クシテ檢出困難ナルコトヲ上ケ、Gosio ハブ氏菌ノ「モルモット」等ニ對シテ毒性ヲ有スルコトヲ實驗シタリ

Segale (pathological 1 Jan. 1915) ハブ氏菌並ニ肺炎菌、連鎖球菌ノ類ヲ信セス。血液、脊髄液、淋巴腺等ヲ材料トシテ特殊ノ「Streptococcus antilanicus」ナル菌ヲ分離シ、家兔、モルモット、鼠等ニ注射シテ「インフルエンザ」様ノ病變ヲ起サシメ、更ニ本菌培養ヲ濾過シテ注射スルモ「モルモット」ハ發病スルヲ以テ、本菌ノ實驗ハマタ濾過說ニモ一致スト稱ス

Micheli ハ一九一九年大正八年九月ノトリエスト内科學會ニ於テ曰クブ氏菌ニ對スル賛否ノ論據ヲ上ケタリ。流行傳播ノ模様、春季ノ流行ニハブ氏菌ヲ見ルコト稀ナリシコト、患者ニテ檢出スル率不定ナルコト、血液中ニナキコト、流行時健康者ノ鼻腔ヨリ出テ、流行時外他ノ疾患ヨリ出テ、流行時ニモ他ノ疾患ヨリ出ルコト、人體ニ向ツテノ感染實驗ノ不成功等ハブ氏ニ反對スル理由トナルモブ氏菌カ「インフルエンザ」患者ヨリ屢々檢出サルルコト、菌ニ毒性アルコト、恢復血清トノ間ニ免疫反應アルコトハブ氏菌說ヲ強カラシム。ブ氏以外ニ擧ケラレタル各種ノ菌ハ何レモ信スルニ足ラス

Micheli et Satta (Arch. p. Scienze med. 1918, No. 1-2) ハ夏及秋流行ニテ患者血液ヲ濾過シテ健康者ニ接種セルモ陰性ナリ。血液培養ハ初期患者ハ陰性、末期患者ニテ双球菌、連鎖菌ヲ得。咯痰ハ屢々ブ氏菌ヲ見肺病竈ニモ五〇%以上ニ之ヲ檢セス

Morschi (II pollicinico, 1 Mars 1915) ハ血液咯痰ヲ濾過シ、又ハ血清ヲ其ノ儘人體ニ注射スルモ發

病セヌ
五、 瑞西

Sahl (Corresp. Blatt f. Schw. 4 Jan, 15 Fev, 1919) ニヨレハ今回ノ流行ハ一八八九年(明治二十二年)ノインフルエンザト同一ニシテ菌力異ルノミ、菌力ノ差ハ國民榮養如何ニ關ス。病原ハ未タ解決セラレヌ。ブ氏菌カインフルエンザノ流行ニ伴ヒテ世ニ出顯スルハ明カナルモ、直ニ病原體トナスヲ得ヌ。濾過性病原體ニモ確證ナシ。恐ラク、ブ氏菌、連鎖球菌、肺炎双球菌其他ノ混合ニヨリテ本疾患ヲ生スルモノニシテ、病原ハ即チ Virus obligatoirement complexe ナラン。故ニ臨床上並ニ病理解剖上千狀萬態ヲ呈スルナリ

Glaus et Fritsche (Correspondenzblatt f. Schw. 24 Auit 1918) ハ解例ハ一九一三〇年ノ壯年ニ多ク、肺ノ合併アリ、連鎖球菌、肺炎球菌、葡萄球菌等ヲ得タレトモ、ブ氏菌ヲ發見セヌ。Stachalin (Correspondenzblatt f. Schw. 10 Auit 1918) ハブ氏菌ヲ咯痰及血液中ニアリト云フ

Zwiky (Schweiz. Arch. f. Tierheil. 1919, Bd. 51, S. 327) 多數ノ驢カインフルエンザ類似ノ咯痰ニ罹リタリト云フ

六、 和蘭

Mandelbaum (和蘭衛生學雜誌一九一八年八月號)ニヨレハ今回ノ流行ハ一八九〇年(明治二十三年)ノインフルエンザト同一物ナレトモ、ブ氏菌ヲ發見セヌ、恐ラク不明ノ病原アル可シ。病疾其者ハ輕キモ、連鎖球菌、葡萄球菌、肺炎球菌ノ合併ニヨリテ重症ト化ス。Kouwe (同上、十月)モ同様ノ意見ヲ述フ。Smijpe, H. Velt (同誌一九一九年八月號)ニテ種々ノ球菌ヲ發見セリ。但シ和蘭ニ於テモブ氏菌ヲ檢出スル率多クナレリ

Van Hoogenhijze (Cent. bl. f. Bakt. Bd. 84, II, 3) ハ患者ノ血液ヲトリテ培養セルニ恰モ「ベスト」菌ニ類似セル一種ノ菌ヲ分離シ患者ノ血清ニヨリテ凝集セラルルヲ見タリ。此ノ菌ハ肺門部、淋巴腺、肺、内耳ヨリ得タル材料ヨリモ培養シタリ。但シ動物實驗ハ陰性ノ結果ニ終ハレリ

七、 英吉利

一九一八年(大正七年)十一月十三日 Royal Society of Medicine ニ「インフルエンザ」討論ノ際 News-Iteme ハ病原ニ就テ論シテ曰ク「インフルエンザ」ハ一ノ疾病ナリヤ、多數疾病ノ集團ナリヤ、今春及七月流行セルモノト秋期ノ大流行ト同一ナリヤ、戦争ノタメ細菌學的研究ハ不充分ナルヲ免レヌ。佛國戰線ニアリテハ本春モ猛烈ナル流行アリシカブ氏菌ヲ目シテ眞ノ病原トナスヲ得ヌ、但シ之ヲ否定シ去ルコトモ得ザリキ。即ブ氏菌ハ流行性感胃ノ原因ナラストスルモ、合併症ヲ惹起スル主要ナル一因タルヲ否ム可ラス。其ノ他合併症ニ於テハ肺炎球菌、連鎖球菌等モ發見セララル。此等ノ細菌以外ニ更ニ未知ノ病原アリヤ未タ解決セヌ

同席上ニ於テ Graham ハ七二三例ノ「インフルエンザ」中二三九例肺炎ヲ發シ、三三例ニ連鎖球菌一六例ニブ氏菌、四例ニ葡萄球菌、七例ニ第三型肺炎球菌ヲ得タリト云フ

Thayer 曰ク、五月流行ニ際シテ「インフルエンザ」ハブ氏菌ヲ鼻液中ニ發見セシモ症候輕カリキ。後ブ氏菌ヲ發見スルコト益々多カリシカ、大體該菌ハ上氣道ニ多ク、下部肺組織中ニ見ルコト少シ。合併症ニテハ肺炎双球菌、連鎖球菌、グラム陰性ノ双球菌等ヲ發見シ、例外ナレトモ、腦膜炎菌ヲ檢出セルコトアリ。肺炎ハ一般ニ肺炎双球菌ニ因ルモノ多シ。肺炎菌ハ第四型、第三型及第二型ニシテ第一型ハ少シ

Whittingham 曰ク、臨床的ノ觀察ニヨレハ七月ノ流行ニテハ咽喉炎、神經性疲勞等ヲ主徴トセシ

カ此ニ於テハ氣管支炎、氣管支肺炎、敗血症ヲ主トス。血液培養ニテハ連鎖球菌及肺炎菌ヲ得タリ。咽喉粘液及咯痰ノ検査ニテハ連鎖菌八〇%、肺炎菌六六%、加答兒性双球菌六二%、葡萄狀菌五四%、ブ氏菌四六%、バチルス、ゼブツス二〇%、肺炎桿菌一六%、腦膜炎菌八%ナリキ。屍體七例中、一例ヨリブ氏菌ヲ出ス。

要スルニ「インフルエンザ」ノ原因ハ單一ノ細菌ニ非ス
Gibson a. Bowman (Med. Res. Com. Special Repton Ser. No. 36, 1919) 患者ノ呼吸器ヲ檢スルニ、Streptoc. viridans, Str. hemolyticus 多シ。ブ氏菌ヲ發見スルコト一様ナラス。血液中ニブ氏菌ナシ。凝集反應モ著シカラス

Patrick (Lancet, 26 Jan. 1919) ハ葡萄狀菌ヲ多ク見ルト云フ
Royal College of Physicians of London, (Lancet, 16 Nov. 1918) ハ病原ヲ不明トシ、ブ氏菌ヲ二次的感染菌トナシ、連鎖菌モ合併症ヲ起スニ意義アリトナス

Pletscher (Lancet, 18 Jan. 1919) ハサウザンプトンノ流行ニ於テ三十六例ノ氣管支肺炎中十一例ニ於テ腦膜炎菌ヲブ氏菌ト共ニ檢出セリ。ブ氏菌ト共ニナレハ腦膜炎菌モ肺内ニ入り得ルナリ
Islington (Lancet, 14 Aug. 1920) ハ Dover, Canterbury, Schoncliffe and Tylke ノ四個所ニテ研究セルニ、前三個所ニテハブ氏菌ヲ一〇〇%ニ近ク發見シ、患者血清ハ免疫反應ヲ呈セリ。然ルニ最後ノ地ニ於テハ唯一例ブ氏菌ヲ見タルノミナリ。而シテ「グラム」陰性双球菌一〇〇%ニ存セリ。即チ地方ニヨリテ病原ヲ異ニスルモノノ如シ

Iyre and Lowe (Lancet 12 Oct. 1918) ハ「ニュージールランド」ノ兵士ニ肺炎ノ流行スルヲ檢シテ、ブ氏菌カ第一ニ入り連鎖球菌カ二次的ニ侵入スルモノノ如シトナセリ

ブ氏菌ヲ以テ「インフルエンザ」ノ原因ト見做ス學者モ少カラス。「ローヤル・ソサイエチー」ノ討論ニ於テハ左ノ諸氏ブ氏菌ニ贊セリ

Milne 一八九七年(大正六年)佛國戰線ニテ感冒ノ小流行アリ、急性化膿性氣管支炎ニシテ肺炎ヲ起スコトハ極メテ稀ナリシカ、氣管支粘膜ヨリブ氏菌ヲ純粹ニ培養シタリ。肺炎菌、葡萄狀球菌、加答兒球菌ヲ混スル場合アリ。心血ヨリブ氏菌ヲ純粹ニ培養セル場合アリ。本年七月ノ流行ニハ十一例中八例ニブ氏菌ヲ見、秋期ニハ四八例中三六例ニブ氏菌ヲ檢出ス。多クハ肺ヨリ多量ニ檢出ス。其他ノ菌ヲ見ルモ二次的侵入ノ菌ナリ。ブ氏菌ハ眞ノ病原體ニシテ單獨ニ或ハ他ノ菌ト連合シテ疾病ヲ生スフ氏菌ハ主ニ氣管及氣管支ノ損傷ヲ作ルモノナル可キモ時々自ラ小葉性肺炎ヲ起スコトアリ。他ノ菌ハブ氏菌ニ從フモノニシテ、原發的病原ハブ氏菌ナルモ、死因ノ重要ナル原因ヲナス肺炎ハ後發性ノ肺炎菌、連鎖菌ニ罪ヲ歸スヘキナリ

Hallows モ略同様ノ意見ニシテ、ブ氏菌ヲ第一ノ病原トシ、連鎖球菌肺炎球菌ヲ二次的感染ト見做ス
Higgins ハ米國ヨリ來レル輸送船上ニテ「インフルエンザ」ヲ爆發セル際、英國ノ病院ニ分チテ收容シ、細菌學的検査ヲナセル成績ヲ比較スルニ、病院ニヨリテ所見ヲ異ニシタリ。例之ハ第二十九號病院ニテハ第四型肺炎球菌ヲ凡テノ剖檢例ヨリ檢出シ、第三十三號病院ニテハ五〇%以上ヨリ溶血性連鎖球菌ヲ發見セリ。又黃金色葡萄狀菌、他型ノ肺炎菌或ハ又流行性腦脊髄膜炎菌ヲ肺ヨリ檢出セルモノナリ。依テ考フルニ是等ノ菌種ハ何レモ二次的侵入者ニ過キスシテ各種ノ菌ハ各病院ニテ感染セルモノナリ。試ミニ檢出セル數ヲ上クレハブ氏菌四六%、肺炎菌四三%、溶血性連鎖球菌三八%、黃金色葡萄狀球菌一〇%等ナリ。ブ氏菌ハ新鮮ナル病竈ニ多ク

檢出セラル。或ル場合ニハ四八例ヲ檢シテ三五例ニブ氏菌ヲ見、内二三例ハ殆ト純粹ナリ。即チインフルエンザノ死因トシテハ肺炎双球菌、溶血性連鎖球菌、葡萄狀球菌等ノ二次的感染ニヨル肺炎ニヨルコト多キモ、ブ氏菌單獨ノ感染ニテ死スル者少シトセス。且ツ最モ屢々遭遇スル菌ハブ氏菌ナリ。但シ濾過性病原體モ看過スルヲ許サス

Lynch ハ屍體材料檢査ニヨリブ氏菌ヲ第一病原トシ、連鎖球菌ヲ二次的侵入者トナス
Spillburg ハ屍體材料ニ就テ化膿性氣管支肺炎ノ場合ハ連鎖球菌ヲ發見シ、出血性肺炎ノ場合ニハ肺炎菌ヲ見ルコトヲ述ヘ、肺ヨリブ氏菌ヲ見ルコト少キヲ説キ、是レ檢査法ノ不完全ナルトブ氏菌ノ消失シ易キトニ基クモノニシテ第一次感染者ハブ氏菌ナリ。全身症狀ハ病毒ノ中毒症狀ナリ

Coakley ハ「ローヤル・ハーバート」病院ニテ一千例ノ患者ノ檢査ニ基キ、ブ氏菌ヲ見ルコト容易ナリ。他ニ肺炎球菌、連鎖球菌、加答兒性球菌、肺炎桿菌等ヲ見ル。初期ノ咯痰ニブ氏菌多シ。血液培養ニテブ氏菌ヲ見ス

Lyre, Alershol ニ流行セル一九一七年(大正六年)四月ノ化膿性氣管支肺炎ナルモノハ「インフルエンザ」ノ症候ニ一致シ、ブ氏菌及他ノ菌ヲ檢出セリ。ブ氏菌ハ家兎ニ對シテ菌力強カリキ。一九一八年(大正七年)二月ノ流行ニテモブ氏菌ヲ見ル。秋期ノ流行ニテモ同様ナリ。疾病ノ初期ニ於テ分泌物少キ間ハブ氏菌ヲ檢出スルコト容易ナルモ、分泌物濃狀トナルニ及ンテ他ノ菌ヲ發見ス、死後肺組織ヨリモ常ニブ氏菌ヲ最モ多ク檢出ス。稀ニハ流血中ヨリ培養スルコトアリ。氏ハブ氏菌ヲ以テ病原トシテノ凡ノ條件ヲ具備スルモノト信ス。但シブ氏菌ハ變化シ易ク永ク植エ繼クトキハ菌力モ免疫力モ減スルモノナリ

Abrahams モ同地方ノ流行カー一九一五—一九一六年(大正四年—五年)ヨリブ氏菌ニテ起ルヲ見タリ。當時ノ流行ハ地方的ナリシモ其ノ症候今回ノ「インフルエンザ」ニ一致シタリ

Mc Intosh (Lancet, 23 Nov. 1918) ハ一九一八年ノ夏普通ノ血液寒天ヲ使用セルニブ氏菌ヲ得サリキ、秋ニハ「ドローグラス氏」ノトリブシン、血液寒天ヲ使用セルニブ氏菌ヲ檢出容易ナリ。屍體肺竈ヨリ六八三%、咯痰ヨリ八四%、鼻咽腔ヨリ六六六%、血液陰性ナリ。之ヲ以テ直ニブ氏菌病原説ヲ主張シ難カリシモ、ブ氏菌カ殆ト常ニ存スルハ明ナリ

Tyler, James, Dublin (Med. Res. Com. Special Rep. Ser. No. 36, 1919) ハ六七例ノ肺炎中六〇例ニブ氏菌ヲ見ル。ブ氏菌ハ氣管支炎ノ原因ニシテ且ツ肺炎ノ第一原因ヲナシ、他ノ菌ハ之ニ伴フモノナラン

Patterson, Little, Williams (同上) モ同様ノ報告ヲナシ、培養基ニ適スルハ兎、馬、人ノ血液ノ順序ナルカ、八十度ニ加熱セル血液ハ何レモ發育ヲ佳良ナラシムト云フ

Pleminga, Clemenger (Lancet, 15 Nov. 1919) ハ免疫ノ性状ヨリブ氏菌病原説ニ反對セントス。ブ氏菌ノ各種ヲトリ凝集反應ヲ檢スルニ相互ノ間ニ著シキ程度ノ差アリ、自家血清ニヨル凝集スルモ、他菌ヲ凝集スルコト少シ。故ニ免疫上ヨリ云ヘハ「ハ」ノ菌族ニシテ「チ」ニコレラ等ニ於ケル單一ノ病原ト趣ヲ異ニス。即チ「バーク」ノ説ク如クブ氏菌ヲ以テ「バンデミー」ノ原因トナスノ反證ナリ。恐ク真ノ病原體ハ此等ノ非病原性ニ近キ菌ノ活動性ヲ喚起スルモノナラン

Little (Royal Society 討論) ノ屍體ニ就テ檢セル結果ハブ氏菌ヨリモ寧ろ、一種特殊ノ「グラム」陽性小型双球菌ニ重キヲ置キ、上氣道ノ感染ハブ氏菌ナランモ、「インフルエンザ」肺炎ノ原因ハ此ノ小キ双球菌ナラントセリ

以上ノ外英國ニテ濾過性病原體ヲ報告セル二組ノ學者アリ

Bradford, Hershford, Wilson (Brit. med. Journal, 22 March, 1919) ハ咯痰ヲ濾過シテ野口氏嫌氣性培養基ニ植エ、グラム陽性ノ球菌ヲ得タリ。五十六度三十分加温ニ抵抗スル小體ニシテ〇・一五—〇・五「ミクロン」ノ大サヲ有シ、ペルケンフェルド濾筒N—Vヲ通ルト云フ

Gibson, Bowman, Connor (Brit. med. Journal, 14 Dec. 1918) ハ咯痰濾汁ヲ猿ノ結膜下ニ注射シ、六日後ニ發病セシメ、其ノ症候インフルエンザニ一致スト云フ

八、北米合衆國

米國ニアリテハ一九一八年(大正七年)春二三ノ兵營ニ特殊ノ肺炎流行シ、之ヲ研究セル結果 Mc Collum 及 Cole ハ溶血性連鎖球菌ニヨル間質性肺炎ナルコトヲ報告セリ。一九一八年(大正七年)秋期ノ流行ハ歐洲ヨリ輸入セラレタルモノト認ム可ク、秋ノ流行ト春季ノ肺炎ト病原的關係アリヤ不明ナリ。「インフルエンザ」大流行ノ端緒ハボストンニシテ、八月二十八日チエルシー病院ニテ其ノ最初ノ爆發ヲ見タリ。Newcomb ハ其ノ際ノ檢索ノ結果、ブ氏菌ヲ全肺炎ノ八二・六%ニ認メ、就中三一・六%ニハ純粹ノ狀ニアルヲ見、ブ氏菌ヲ以テ「インフルエンザ」病原菌ト主張セリ。同時ニ濾過性病原體ヲ人體ニ於テ實驗シ全ク陰性ノ成績ヲ得タリ

Volbach (Johns Hop. Hosp. Bulletin, April 1919) ハ Devens 兵營ニ於ケル「インフルエンザ」屍體ニ就テ細菌學的研究ヲナシ、ブ氏菌ヲ時々純粹ニ檢出シ、之ヲ以テ病原トナセリ

Mender, Means and Hopkins (Am. J. med. Soc. 1919, p. 158) Mac Neal (Proc. exp. Biol. u. med. 1919, p. 16) 等ハ米國軍隊ノ「インフルエンザ」ヲ研究シテブ氏菌ヲ最も重要ナル病原體トナス。合併症ナキ患者ノ鼻咽腔ニアルコト、肺炎ノ病竈ニアルコト、殊ニ初期ニハ純粹ニアルコト、古キ病竈ヨリモ

新病竈ニ多キコト等ハブ氏菌ノ病原性ヲ語ルモノナリ

ロックフエラー研究所ノ Avery ハ「ヘモグロビン」油酸曹達寒天ヲ以テブ氏菌檢出ニ便ナルヲ説キ、同所ノ Pritchett and Sullivan (J. exp. med. March 1919) ハ上記ノ培養基ヲ使用シテ檢査セルニ合併症ナキ場合ニ八三%、氣管支肺炎ニテ九三%、肺炎ニテ五五%、健康者(流行時)ニテ四三%ブ氏菌ヲ檢出シタリ。即チ「インフルエンザ」流行時ニハ最も普通ナル細菌ナルコトヲ證セリ

Trick (Am. J. med. Soc. 1919, p. 158) ハ Beauregard 兵營ノ秋期ノ流行ニ就テ、兵員ノ約半數感染シテ七千五百人ノ患者ヲ生シ中千四百七十五人(一九六%)肺炎トナリ、其中四百七十七人(二九%)死亡セルヲ舉ケ、看護人ハ三百人中百四十九人發病シ、醫員ハ六百十人中三百二十七人罹病セリ。細菌學的ニ檢査セルニ、大多數ヨリブ氏菌出ツ。肺炎ヨリハブ氏菌ト肺炎菌ト出テ、連鎖菌モ多シ。肺炎菌ハ四型多ク、三型モ稍多シ。肺炎菌及連鎖球菌ノ菌血症ヲ起セルモノノ多部(八八・八%)ハ死亡ス。ブ氏菌ハ血液中ヨリ出テス

「インフルエンザ」ヲ細菌學的ニ研究シテブ氏菌其ノ他ヲ檢出スル率ハ一様ナラス。以下其ノ數例ヲ上ケン

Jordan (Public Health Rep. 1919, No. 33) ハ鼻咽腔材料ヲ新鮮血液寒天ニ塗布培養セルニ其ノ成績一様ナラス。最も普通ニ見ラルルハブ氏菌ト Mulders ノ双球菌ナリ。一九一八年(大正七年)十月ヨリ一九一九年二月マテノ檢査ニ於テブ氏菌ハ患者ノ六四%ニ發見セラレ。但シ肺炎ヲ起セル場合ハ之ヲ見ルコト少シ。其ノ他連鎖球菌肺炎球菌、加答兒球菌、肺炎桿菌、葡萄狀球菌等モ檢出セラレ

Daniel (Am. J. Med. Soc. 1919, p. 158) ハ Dodge 兵營ニテノ檢査ヲ記シ、合併症ナキモノニ六六%

ブ氏菌アリ。解剖セル肺炎ヨリハ初メハ九六%ナリシカ後ニハ四九三%ニブ氏菌ヲ見タリ。他ニ溶血性連鎖球菌五九四%、非溶血性連鎖球菌二四三%、葡萄球菌一八九%、第一型肺炎球菌一五%、第二型二九%、第三型五八%、第四型一五%ナリ

Lucke, Wight, Kime (Arch. intern. med. 1919, No. 24) ハ一八一八年(大正七年)秋期ノ流行ニ於テブ氏菌ヲ最モ多ク検出ス。次イテハ不溶血性連鎖球菌、肺炎球菌、溶血性連鎖球菌多シ

Small and Slangl (J. Am. M. As. 1920 Vol. 74) クック、カウソテ病院ノ「インフルエンザ」入院患者八二九例中九一%ハ肺炎ヲ起シ、肺炎ノ四七八%ハ死ス。其ノ患者ノ全部ヨリブ氏菌ヲ検出シタリ。咯痰及咽腔ヨリ九五五%ニブ氏菌アリ。肺炎ヨリモ七五%検出シタリ。肺炎菌モ多ク見ラルルモ、肺炎球菌ハ元來八四四%ニテ口腔ニ常在セルモノナリ

Symmers (J. Am. M. As. 1920 V. 74) ハ連鎖球菌ヲ最モ多ク検出シブ氏菌肺炎球菌、葡萄球菌等ヲモ見タリ

Matz (Am. J. med. Soc. 1919, P. 138) ハ Travis 兵營ニテ九六八例ヨリ三九%ニブ氏菌ヲ培養ス

Arnold (J. of Lab. and Clin. 1920 P. 652) ハ Avery ノ「ヘモグロビン」ノ油酸曹達寒天ヲ使用シテ患者ノ八六五%ニブ氏菌ヲ見ル。鼻炎、喉頭加答兒ニ七七七%アリ、流行時ニハ健康者ニモ三五%ニテブ氏菌ヲ検出シタリ

以上ノ諸報告ニ見ルカ如クブ氏菌ヲ「インフルエンザ」ノ多數ニ發見スルハ事實ニシテ、彼ノ極メテ検出シ難キ菌カ比較的大ナル%ニ検出セラルルハ、兎ニ角「インフルエンザ」ノ「バンデミー」ニ伴ヒテ、ブ氏菌カ世界的ニ瀰蔓セルヲ證スルモノナリ。ブ氏菌ノ真正ノ病原的意義ハ、單ニ其ノ檢出率ノミヲ以テ決定シ得ヘキニ非ス。最モ肝要ナルハブ氏菌カ人體若クハ動物ニ於テ「イン

フルエンザ様疾患ヲ發見セシメ得ルコトナリ。此ノ意味ニ於テ行ハレタル動物實驗ハ未タ完全ナル成績ヲ擧ケ得タルモノナキモ、有力ナルモノヲ摘出スヘシ

Keegan (J. Am. M. As. 28 Sep. 1913) ハ咽頭分泌物ヲ培養セルニグラム陽性双球菌ヲ多數ニ發生シブ氏菌ヲ分離スルヲ得ス、是レブ氏菌ノ培養困難ナルカタメナラン。咯痰ヲ洗滌シテ「マウス」ニ注射セルニ其ノ結果ハ不定ナリ。肺臟穿刺液、屍體肺炎ヨリ培養セルニ二十三例中ブ氏菌八二六%ニ陽性ニシテ、三一六%ハ純粹培養ヲ得タリ。他ニ肺炎菌ヲ五六五%ヲ得タルモ、元來肺炎菌ハ健康口腔ノ常在菌ニシテ、ブ氏菌ヲ以テ病原體トナスヲ妨ケス。ブ氏菌ハ歐洲戰場ニ於テ多數ノ軍隊カ異常生活ヲナセルニ乘シテ、多數ノ人體通過行ハレ、自ラ菌力増大シテ流行ノ源ヲナセルモノカ

キーガン氏ハ「インフルエンザ」ノ他ノ病原説、殊ニ濾過説ヲ否定センカタメニ人體實驗ヲ行ヒタリ。患者ノ咽腔洗滌液ニ咯痰ヲ加ヘ、之ヲ濾過シ、材料採取後四時間半後、撰出セル健康篤志者ノ鼻腔ニ注入セリ。此ノ人々ハ未タ流行ノ危険ニ曝發セラレサリシ者ニシテ充分「インフルエンザ」感染性ヲ有シタルモノナランモ、其ノ結果ハ陰性ニ終ハレリ

McCoy (Pub. Health Rep. 1919 No. 33) ハボストン及桑港ノ海軍兵營ニ於テ人體感染實驗ヲ行ヒタリ。ボストンニテハ既ニ一回ノ流行ヲ終ハレル後ナリシカ、試験人員六十八人中四十七人ハ未タ罹患セサリシモノナリ。桑港ノ人員ハ未タ「インフルエンザ」ニ遭遇セサルモブ氏菌三種肺炎菌及溶血性連鎖球菌ノ「ワクチン」注射ヲ受ケタル者ナリキ。試験材料トシテハブ氏菌純粹培養患者上氣道分泌液ヲ鼻腔内ニ注入シ、又患者血液ノ皮下ニ注射シタリ。患者鼻腔ヨリ分泌液ヲトリテ注入試験ヲ行フ迄ニ僅ニ三十秒ヲ經過セルニ過キササルモノアリ。又患者ノ傍ニ十乃

至八十三時間接觸セシメタルモノアリ。鼻分泌液濾汁ヲ皮下及結膜下ニ注入セルモノアリ。以上ノ實驗ハ悉ク陰性ノ成績ニ終ハレリ

Rosenau (J. Am. M. Ass'n, 1919, 27 Aug.) ハボストン港ノ檢疫場タルギヤロツプス島ニ於テ多數ノ有志者ヲ募リテ、人體實驗ヲ施行シタリ。年齢ハ十八以上二十五歳ニシテ「インフルエンザ」ニ感受性高キモノヲ擇ミタリ。彼等ハ未タ「インフルエンザ」ト思ハル熱性疾患ヲ耐過セサル者ナリ。(一)「ブ」氏菌實驗。十三種ノ菌種(中ニハ新ニ肺屍體ヨリ分離セルモノアリ)ヲ噴霧器ニヨリテ鼻腔、咽喉ニ吹キカケ、深呼吸ヲナサシム

(二)口腔、鼻腔、氣管支ノ粘液ヲ以テセル實驗。初期ノ患者數名ヨリ得タル材料ヲ眼、鼻、咽喉ニ噴霧シタリ

(三)血液注射實驗。患者血液ヲ一〇坵宛靜脈内ニ注入セシメタリ

(四)上氣道粘液皮下注射試驗。上氣道粘液ヲ濾過シ、三、五坵ヲ皮下ニ注射ス

(五)自然感染法ニ準スル實驗。患者ト談話セシメ、呼吸ヲ吸入セシメ、顔面ニ向テ咳嗽セシメタリ。以上ノ實驗ハ悉ク陰性ノ結果ニ終ハレリ。實驗ニ供シタル人ハ既ニ輕ク罹患シテ免疫ヲ得タルカ、或ハ天然免疫ノ高カリシモノカ之ヲ決定シ難シ。要スルニ「インフルエンザ」ノ感染實驗ハ極メテ困難ナルヲ知ラシム。故ニ他ノ實驗家カ、人體若クハ猿ノ體ニ於テ實驗的「インフルエンザ」ニ成功セル如ク報スル者アルモ、俄ニ之ヲ信シ難シ

「ブ」氏菌ヲ以テ研究室裡ノ小動物ニ一定ノ病原作用ヲ證セントセル實驗ハ少カラス。然レトモ人體ニ於ケル「インフルエンザ」肺炎ト類似ノ病變ヲ作ランコトハ困難ナル仕事ナリ。「ブ」氏菌ノミヲ用ヒテ肺炎ヲ起サシメタル實驗ハ左ノ如シ

Major (Journ. of Med. Res. 1920, Vol. 41, p. 373) ハ「ブ」氏菌ノ侵入力ハ呼吸器ノ粘膜ニ限ラレタルヲ見、膜腔若クハ血管内ニ「ブ」氏菌ヲ注入スル場合ノ病變ハ是レ菌體毒ノ作用ニヨルモノニシテ、人體「インフルエンザ」の場合ト同一視ス可カラサルヲ以テ、「ブ」氏菌ヲ動物ノ氣管内ニ注入セルニ氣管支肺炎ヲ起シタリ。但シ肺炎ハ狭ク、僅ニ肺門部ニ見ラレタリ。「クロール」瓦斯ヲ吸入セシメテ呼吸器ヲ刺戟シ置キ「ブ」氏菌ヲ注入セシニ、其ノ變化ハ著明ニシテ人體ノ「インフルエンザ」肺炎ニ一致シ、且ツ「ブ」氏菌ヲ純粹培養シ得タリ

Hinke and Cecil (J. Am. M. Ass'n, 1920, Vol. 74, pp. 170; J. of exp. med. 1920, Dec.) ハ「ブ」氏菌ノ菌力ヲ人工的ニ高メ、之ヲ猿ノ鼻腔及氣管ニ注入シテ氣管支肺炎、肺炎等ヲ起サシメ、其ノ狀真ノ「インフルエンザ」ヲ彷彿セシメ得タリ。從來「ブ」氏菌ヲ以テ實驗的「インフルエンザ」肺炎ヲ作ラント企テシモ未タ成功セル者ナシ。恐ラク「ブ」氏菌ノ菌力ハ容易ニ變化スルモノナルカタメト、時ニ或ハ「ブ」氏菌ト稱スルモノノ中ニハ形態之ニ類スル「ザ」プロフィット「ヲ」モ含ムコトアルニヨル可シ。

此等ハ慎重ニ検査シテ「ブ」氏菌ナルコト確實ナリト認ムル一ノ菌種ニ就テ實驗ヲ行ヒタリ。「インフルエンザ」肺炎患者ヨリ分離シテ既ニ六週間ヲ經過シ「マウス」ニ對シテ菌力ヲ失ヘルモノヲトリテ實驗ニ供シタリ。此ノ「ブ」氏菌ヲ「マウス」腹腔ニ注射シ、六—八時間後ニ「マウス」ヲ殺シテ腹腔液ヲ褐色血液寒天ニ培養シ、翌日他ノ「マウス」ニ注射ス。始ハ一斜面ニテモ「マウス」ヲ殺ササリシ菌カ漸次菌力ヲ高メ、四分一斜面ニテ六—八時間ニテ「マウス」ヲ倒スニ至レリ。「マウス」ハ腹膜炎及菌血症ニテ死ス

「マウス」ヲ十一代通過セル後、四乃至十四斜面ノ培養ヲ猿ノ腹腔ニ注入シ、六—八時間ニテ腹腔液ヲ取リテ培養シ、又ハ死セル猿ノ腹腔液ヲ培養ス。猿ハ腹膜炎及中毒症ヲ起シ、白血數減少著